五街道と甲州道中

1. 五街道

慶長 5 年（1600）、関ヶ原の戦いに勝った徳川家康は、公用の輸送などを円滑におこなうために、翌慶長 6 年、東海道に伝馬（てんま）を設けました。次の年には中山道にもこの制度を設け、街道の整備を進めました。

慶長 8 年（1603）、江戸に幕府を開いた家康は、江戸日本橋を起点とした街道を整備し、中でも主要街道である東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中は五街道と呼ばれました。

東海道は太平洋沿いに進み、宮（名古屋市熱田区）から桑名（三重県桑名市）へは海路、その後鈴鹿峠を越えて草津（ 滋賀県草津市 ）で中山道と合流し京都の三条大橋まで進みます。中山道は本州中央部の山間を通り、太田（岐阜県美濃加茂市）で木曽川を渡り、赤坂（岐阜県大垣市）を経て京都三条大橋まで、日光道中は千住（足立区及び荒川区）から宇都宮（栃木県宇都宮市）を経て日光まで、奥州道中は宇都宮までは日光道中と同じ道筋で、その後北上して白河（福島県白河市）まで、そして甲州道中は江戸から西に進み、下高井戸から甲府を経て下諏訪（長野県下諏訪町）まで、約 208．5 ㎞を結ぶ街道です。

五街道のうち、江戸と京都を結ぶ東海道、中山道は、公用交通の利用者が多い街道でしたが、甲州道中は少ないものでした。大規模な公用交通である参勤交代に伴う大名の通行をみると、西日本方面の諸大名は東海道や中山道を利用し、東北方面の大名は日光・奥州道中を利用しましたが、甲州道中は、幕末期の段階で飯田藩堀家、高遠藩内藤家、高島藩諏訪家の 3 家の利用にとどまり、それぞれ 1 万 5 千石から 3 万石という規模の小さい大名だったため、内藤家の場合でも総勢 100 名程度の利用でした。甲州道中のその他の公用交通利用は、幕府の甲府勤番武士や、街道沿いの旗本にとどまりました。

2. 街道と宿場

街道では公用交通利用者に運搬用の人と馬を提供するため宿場が設けられました。東海道は 53 宿、中山道は 67 宿、日光道中は 21 宿、奥州道中は 10 宿（宇都宮から先）、甲州道中は元禄 12 年（1699）に内藤新宿が開設した後は 45 宿の宿場がありました。

主に武士の公用旅行者が利用するために、各宿場では規定の人馬を常備していました。この数は街道により異なり、東海道の各宿場では 100 人、100 疋。中山道では 50 人、50 疋。甲州道中などのほかの 3 つの街道では 25 人、25 疋が基準となりました。参勤交代に伴う大名行列等、大きな公用交通の利用により、常備している人馬が足りなくなる場合には、宿場近隣の村々に人馬の

提供を命じました。これを助郷（すけごう）といいます。

甲州道中の宿場は別表のとおりです。しかし、下高井戸、上高井戸のように、ひと月の中で宿場業務を分担している合宿（あいしゅく）と呼ばれる宿場や、小原、与瀬（共に神奈川県相模原市）のように、日本橋方面または下諏訪方面、片方だけの業務を務める宿場がありました。こうした変則的な業務の宿場が多いのは、公用交通が少なかったことが一因と考えられています。

甲州道中の宿場

	日本橋からの順番	宿場名	宿場業務の日程
1	1	内藤新宿	
2	2	下高井戸	1日から15日まで
3		上高井戸	16日から月末まで
4	3	国領	25日から月末まで
5		下布田	19日から24日まで
6		上布田	13日から18日まで
7		下石原	7日から12日まで
8		上石原	1日から6日まで
9	4	府中	
10	5	日野	
11	6	八王子	
12	7	駒木野	1日から15日まで
13		小仏	16日から月末まで
14	8	小原	日本橋へ（下り）のみ
15		与瀬	下諏訪へ（上り）のみ
16	9	吉野	
17	10	関野	
18	11	上野原	
19	12	鶴川	
20	13	野田尻	
21	14	犬目	
22	15	下鳥沢	16日から月末まで
23		上鳥沢	1日から15日まで
24	16	猿橋	
25	17	駒橋	
26	18	大月	
27	19	下花咲	16日から月末まで
28		上花咲	1日から15日まで
29	20	下初狩	16日から月末まで
30		中初狩	16日から月末まで
31	21	白野	23日から月末まで
32		阿弥陀海道	16日から22日まで
33		黒野田	1日から15日まで
34	22	駒飼	21日から月末まで
35		鶴瀬	1日から20日まで
36	23	勝沼	
37	24	栗原	
38	25	石和	
39	26	甲府柳町	
40	27	韮崎	
41	28	台ケ原	
42	29	教来石	
43	30	蔦木	
44	31	金沢	
45	32	上諏訪	

3. 甲州道中の道筋

江戸時代、江戸日本橋を始点にしていた五街道の中で、新宿を通っていたのが甲州道中です。甲州道中は江戸日本橋から東海道と同じ道筋をたどって西に向かい、日本橋交差点で東海道と別れて北に曲がった後、和田倉門から桜田門と江戸城内堀沿いに進みます。その後半蔵門前から西に曲がり、直進すると現在 JR 四ツ谷駅がある四谷見附にいたります。現在は半蔵門から外堀へと直進する国道 20 号線があり、外堀には四谷見附橋が架かっていますが、江戸時代には四ツ谷駅直前の千代田区側で一度北の市谷方面に曲がり、すぐに西の四谷方面に曲がる道筋となっていました。現在 JR 四ツ谷駅北の市ケ谷駅側に外堀を渡る道路がありますが、この道筋が江戸時代の甲州道中となります。

外堀をわたった甲州道中は、現在の三栄通りを直進し、最初の四谷一丁目交差点で南に曲がり、すぐ現在の国道 20 号線に突き当たり、そこを西の新宿方面に曲がります。その後甲州道中は四谷大木戸まで西に直進します。現在、国道 20 号線は四谷四丁目交差点で御苑トンネルに入りますが、江戸時代の甲州道中は新宿大通りとなります。

現在の四谷四丁目交差点付近には、四谷大木戸がありました。四谷大木戸は江戸への物資や人馬を監視するため元和 2 年（1616）に設けられました。当初は木戸を設け、木戸脇の四谷より北側には馬改番屋がありました。しかし、寛政 4 年（1792）に木戸と馬改番屋は廃止され、その際に石垣が築かれました。この石垣は明治 5 年（1872）に撤去されました。四谷大木戸を過ぎると、すぐ南側に玉川上水の水量と水質を管理する玉川上水水番屋がありました。ここをさらに進むと高遠藩内藤家屋敷の入り口前にたどり着きます。ここが現在の新宿一丁目交差点で、内藤新宿の入り口です。

甲州道中は内藤新宿の入口から西へ新宿大通りを走っています。現在、伊勢丹百貨店がある新宿三丁目交差点は、追分と言われていました。ここで甲州道中と青梅街道が分かれ、甲州道中はここで南に進み天龍寺の前で再び西に向かい、下高井戸宿へ進みます。